

25.「姥神大神宮渡御祭と江差追分」(江差町)

姥神大神宮渡御祭の起源は360年前にさかのぼる。その年のニシンの豊漁に感謝を込めて行われたお祭で、現在も毎年8月9日～11日にまちは祭り一色となる。13台の山車(やま)が祇園囃子の調べにのって町内を練り歩きさまは圧巻。江差追分は中山道の馬子唄をルーツに、北国の厳しい風土にもまれながら多くの先達に唄い継がれてきた。日本国内だけでなく、海外にも多くの愛好者を持つ。はるか遠い江差のニシン景気を現代に伝える。



26.「上ノ国の中世の館(たて)」(上ノ国町)

上ノ国町の夷王山中腹に広がる山城「勝山館」跡。松前藩の祖とされる武田信広が15世紀に築城し、200戸以上の和人とアイヌ民族が一緒に暮らしていた。北海道の中世史には謎の部分も多いが、勝山館・夷王山墳墓群の調査により、歴史のミッシングリンクを埋める多くの資料が発掘された。日本海を一望する館跡からは中世のロマンが感じられる。



27.「福山(松前)城と寺町」(松前町)

江戸時代の日本で最後に築城された城郭で、箱館戦争では旧幕府郡と官軍の戦場となった。城の北側には道内唯一の近世的な寺町があり、龍雲院、法源寺、松前家の菩提寺・墓所など5つの寺が現存している。また、城と寺町の一帯は北海道でもっとも早く見ごろとなる桜の名所でもある。松前町の歴史を知ることは開拓以前の北海道の歴史を理解する上で重要。



28.「五稜郭と箱館戦争の遺構」(函館市など)

箱館戦争は明治元年秋の旧幕府脱走軍の侵攻に始まり、翌年春の新政府軍の反撃により、五稜郭開城で終わった。戦いは道南一帯に及び遺跡や遺構が随所に見られる。榎本武揚率いる旧幕府脱走軍が上陸した鷲ノ木、蝦夷島臨時政権の根城となった五稜郭や急ぎ造成された四稜郭、猛攻を受けた福山城、開陽丸が沈没した鷗島沖、新政府軍が上陸した乙部海岸、激闘の二股口、土方歳三が戦死した一本木関門跡など、戦いのすさまじさを偲ばせる。



29.「函館山と砲台跡」(函館市)

華やかな夜景で有名な函館山にはもう一つの顔がある。津軽海峡を望む函館山は明治中期に要塞化が進められ、多数のレンガ壁・コンクリート洞窟掩蔽壕・砲台座が残る。大規模の旧状を残す軍事土木遺産は全国的にも例が少ない。終戦まで立入制限されたため、今も貴重な動植物の宝庫となっており、自然にふれる散策コースとして市民に親しまれている。



30.「函館西部地区の街並み」(函館市)

函館は安政6年、横浜、長崎とともに最初に開港し、近代日本の幕開けを告げた町であり、西欧文化に開かれた玄関口として栄えてきた。函館西部地区には、埠頭倉庫群、函館どっくのような歴史的港湾施設、旧函館区公会堂やハリストス正教会復活聖堂に代表されるハイカラな洋風建築とともに、和洋をたくみに交えてデザインされた商家や住宅が建ち並ぶ。



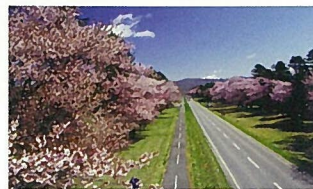
31.「路面電車」(函館市、札幌市)

函館市電は明治期に馬鉄で出発し、大正2年に電車化、今も市民の足として定着している。路面電車が醸し出す風情を含めて観光都市・函館で果たしている役割は大きい。大正7年に始まった札幌市電は、路線の拡大や車両の改良を加え都市交通の中心だったが、地下鉄の開業などによって現在は1路線のみが運行。ササラ電車は札幌の冬の風物詩。



32.「静内二十間道路の桜並木」(新ひだか町)

二十間道路は、和種馬の大型改良のため明治5年に黒田清隆が進言し、旧静内町から新冠町にまたがる地域に開設した御料牧場のための行啓道路。龍雲閣まで直線で7km、幅20間(約36m)にわたって両側に約3000本にのぼる樹齢90年のエゾヤマザクラなどの並木が続く。雄大な日高山脈を背景とした景観は我が国で類を見ないスケールとして知られる。



33.モール温泉(音更町など)

モール温泉は、泥炭を通して湧出するもので独特の黒っぽい湯が特徴。日本では十勝に代表して見られるほか、石狩平野や豊富町などでも湧出している。呼び名のモールは「Moor」のドイツ読みになむるので、泥炭のことを意味する。主成分は植物性腐食質で、鉱物成分より植物成分が多いのが他の温泉との違い。また、熱源は地熱に加えて、地下での植物の堆積物による発酵熱と考えられている。



34.「螺湾(らわん)ブキ」(足寄町)

足寄町の螺湾川に沿って自生する螺湾ブキは高さ2～3mに達する巨大なブキ。かつては高さ4mに及び、その下を馬に乗って通ることができたというが、なぜ大きくなるのかはいまだに謎が多い。その味は繊細で、ミネラルが豊富で繊維質にも富む。地元では産学官が一体となった商品開発も進めており、足寄町オリジナルのブランドとして知名度を高めている。



35.「旧国鉄土幌線コンクリートアーチ橋梁群」(上士幌町)

昭和初期に十勝内陸の産業開発を目指して建設された第1級の鉄道遺産。市民と産学官が一体となった運動の結果、34橋梁が保存された。中でもタウシユベツのアーチ橋は、糠平湖の水位によりその姿を変える「幻の橋」として近年人気が高まっている。地元の担い手たちの積極的な活動は産業遺産の保全・活用モデルとして全国的に知られている。



36.「霧多布湿原」(浜中町)

湿原景観を構成するすべての要素が一望できる学術的にも貴重な湿原。一部は「霧多布湿原泥炭地形成植物群落」として大正11年に天然記念物に指定され、数百種の高山植物が自生している。春から秋にかけて咲く花々の美しさを楽しみ、タンチョウや白鳥など百種の野鳥も観察できる。地域では湿原保全のトラスト活動が積極的に展開されている。



37.「摩周湖」(弟子屈町)

阿寒国立公園の原始の自然に囲まれた「神秘の湖」は世界有数の透明度と美しい乳白色の霧の風景で知られる。摩周湖には流入河川も排水河川もないが水位は一定している。その景観は、北海道の湖沼と山岳の複合景観として最も代表的なもの。摩周湖および周辺環境の保全に向けた「摩周湖宣言」に集約される地域住民の取り組みは高く評価されている。



38.「根釧台地の格子状防風林」(中標津町など)

中標津町、別海町、標津町、標茶町にまたがる格子状防風林は、スペースシャトルからも撮影されたように、そのスケールにおいても地球規模的な、北海道ならではの雄大なもの。幅180m、総延長643kmの林帯は、防風効果だけでなく野生生物のすみかや移動の通路としての機能も果たしている。開拓時代の殖民地区画を示す歴史的意義も持つ。

